

序

章



閑々翁「蛙」絵

はじめに

俳諧史上、松永貞徳まつながていとく、西山宗因にしやまそういんなど名の知られる俳人は数多くいるが、もつとも有名な俳人といえは松尾芭蕉にとどめをさす。その芭蕉が没したのは元禄七年（一六九四）十月十二日、享年五十一歳であった。芭蕉は没したが、たとえば

古池や蛙飛びこむ水の音

など、その詠句は多くの俳書に採録され続け、人口に膾炙し、〈故・芭蕉〉の句を発句とした「脇起し」の連句も少なからず詠まれた。芭蕉の作品は、すでに全集や選集が編まれている。しかし、そうした形で完結せず、没後三百年以上も経た現在も、新たに編集した作品のアンソロジーなどが新著として刊行され続けている。

また、区切りのよい芭蕉の年忌には、いわば「追慕的イベント」がおこなわれる。芭蕉を慕って



図1 六俳人の絵

句会が催されたり、句集が編まれたり、句碑が建てられたりしてきた。三百年忌に各地で盛大にイベントがおこなわれたことは記憶に新しい。

江戸時代の秋田の俳人吉川五明（享和三年（一八一〇）三没、七十三歳）は「芭蕉翁像画之讚」（藤原弘氏編『吉川五明集上』昭和四十九年、秋田俳文の会）に「翁は死して死せざるの人」と記したが、芭蕉は平成の（今でも生きている）あるいは（忘れられることのない）俳人なのである。

ところで、芭蕉の没後、右のような「追慕的イベント」がおこなわれ続けている現象をもって〈芭蕉文化〉とも称すべきものが醸成されたとみることも可能であろう。単なる作品の享受にとどまらず、その生涯、その思想、その伝説などさまざまなことを含む〈芭蕉を享受する文化〉が各地で形成されてきたのである。

〈芭蕉文化〉は、俳諧、俳句を嗜む者がいるところ、つまりほぼ日本全国に存在する。現代を視野に入れるならば、海外も含まれる。また没後から今日までと長期にわたっている。空間的に広く、時間的に長く展開し続けるため、それはこのようなものである、と簡単に述べられるものではない。しかし、特に江戸時代に限っていえば、〈芭蕉文化〉の展開の典型的な一つの例を、加賀国（現在の石川県の一部）の小松地方にみることができる。

その理由の第一としては、小松の地が「奥の細道」の旅で芭蕉が訪れた地であることがあげられる。「奥の細道」は、芭蕉の作品の中でも特に脚光を浴び続けている。今日でも、平成十八年、ポプラ社から刊行された『えんぴつで奥の細道』は大ヒットし、「鉛筆で書く名作」のブームをおこした。小松の地は、そのつど人々に「反芻され、記憶されることになる。

また江戸時代の俳人は、「奥の細道」の順路の行脚をよくおこなない、俳諧宗匠ならば必ずすべきものにもなってくる。小松にも少なからずの俳人が杖を留めてきた。その状況は今日でも変わらない。井本農一氏の『奥の細道をたどる』（昭和四十八年、角川選書）や『奥の細道を歩く』（平成元年、新潮社）などその行程をたどった紀行文・随筆や写真集などが少なからず出版されている。平成十九年にはNHKのテレビ番組「趣味悠々おおくのほそ道を歩こう」が放送された。当然、それらには小松もとりあげられている。

さらに芭蕉を記念してのイベントもおこなわれる。たとえば第二次世界大戦中の昭和十八年十月二十四日、芭蕉が「奥の細道」の旅で訪れた多太（多田）神社で「芭蕉翁二百五十年祭」がおこなわれた。その抄録である宮下与吉編輯『北国句集征旗』（昭和十八年、北国新聞社）によれば、参加総数三百六十名、出句総数二千句であった。

「奥の細道」中に記された芭蕉が訪れた地は、芭蕉ゆかりの名所として、地域的に「芭蕉文化」の重要な位置をしめる。小松はその一カ所なのである。

また関連して、芭蕉が訪れたさいに、小松出身の牧童・北枝兄弟はくしがその門下になったことも看過できない。加賀国は「細道行脚の間で唯一の蕉門俳壇の成立」した地で、「鋭さに特徴を認めるいわゆる加賀風と呼ばれる書体で多くの（芭蕉の）真蹟が残されている」地である（櫻井武次郎氏「終焉まで」『芭蕉講座第一巻 生涯と門弟』昭和五十七年、有精堂）。芭蕉の門流の俳人が多くをしめ、「加賀蕉門」と称された。その「加賀蕉門」の初期に重要な働きをしたのが北枝である。北枝は、芭蕉の代表的門人「蕉門十哲」の一人にあげられることもある。芭蕉の没後になされた門下や門流の人々のい

わば〈宣伝活動〉の結果、芭蕉を崇拜するようになったのではなく、芭蕉在世時から「蕉門」であったのである。そして芭蕉―北枝の系譜を称する俳人が「蕉門」を称しているのである。

こうした地域の文芸活動の背景に、「商人」を中心とした豊かな町衆文化のあったことも重要である。この階層は俳諧の主要な享受層である。しかも「加賀百万石」といわれる大国の領内の商人として経済的余裕があるため、俳諧を学習し、句会を開催し、俳書を購入し、句集の刊行をすることができた。また他国の「蕉門」の俳人と交流し、宗匠クラスの俳人を迎えることなどもできた。

本書は、「加賀国小松」という芭蕉の訪れた地域の人たちを中心とする俳諧史について述べるものである。それは見方によつては一地方俳諧史にすぎないかもしれない。しかし、それは先に述べた「芭蕉文化」の近世的展開の一典型として、決して看過できない文化事象だったと考える。

本書で引用した資料等については、本文中に特に明記のないものは巻末の「◎参考・引用文献一覧」を参照していただきたい。原則として引用した資料には句読点、濁点を付した。また、特に断らない限り、後藤長平氏の言説は「素仏蔵小松俳諧史資料解題」（『小松市立博物館研究紀要』四十一号）、大河良一氏の言説は『改訂加能俳諧史』（昭和四十九年、清文堂）により、図は架蔵本による。